

<前回：現代キリスト教思想の基本動向>

1. 現代

「本連載のテーマは「現代神学の動向」であるが、この場合の「現代」についてどのような時代設定を行うべきだろうか。いつから現代なのだろうか。先に引用した文献で森田は、『現代』とはどの時期を指すのか。・・・現代と近代の間には明瞭に一線は引きがたい」と述べているが、「現代」について「いつから」との問いは適切でないのかもしれない。そうではあっても、時代区分は避けることは困難であり、(**)本連載では、現代神学の起点を便宜上一九二〇年代に設定しておきたい。それは、現代神学の発端をドイツにおける弁証法神学運動に見るという判断であり、森田も栗林もこの点については同意するものと思われる。なお、次回説明するように、本連載では、この「現代」を、一九六〇年代までと一九七〇年代以降(現在まで)とに区分したい。また、「現代神学の新しい動向」という場合の「新しい」であるが、これについては、二一世紀以降としておこう。したがって、本連載の取り扱う素材は、栗林輝夫『現代神学の最前線』(二〇〇四年)とかなりの程度においてオーバーラップすることになる(取り扱い方が同じになるわけではない)。」

(芦名定道「第1回 冒険への招待」、『福音と世界』2016.10、新教出版社)

2. 時代区分1

・これまでの議論からわかるように、動的プロセスとしての「近代」という歴史時代を、一義的かつ客観的な仕方で前後の歴史時代から区別することは困難である。これは、近代のみならず、時代区分全般に対して指摘されねばならない事柄であり、いわゆる弁証法的歴史理論の主張する歴史理解に他ならない。

・ティリッヒは、弁証法的歴史理論の先駆者として、フィオーレのヨアキムの歴史哲学を位置づけているが、⁽⁵⁾それによれば、歴史は、父の時代と子の時代、そして聖霊の時代という三つの段階を経て展開する。

・ここでは、近代という時代区分を考える際に重要になるメルクマールとして、近代というシステムを構成する諸サブシステムに注目してみたい。近代的システムの生成に対して、キリスト教、とくにプロテスタント・キリスト教が決定的な寄与を行ったことについては、これまで様々な仕方で議論がなされてきた。マックス・ウェーバーは、プロテスタント(カルヴィニズム)の禁欲的エートスと資本主義の精神との関係を指摘し(ウェーバー・テーゼ)、リンゼイは、ピューリタンの教会会議の経験と議会制民主主義との積極的関わりを論じている(リンゼイ・テーゼ)。そして、マートンは、ピューリタンの科学者が近代科学の成立に重要な寄与をなしたと論じた。⁽⁹⁾これらのサブシステムの最初の生成の現場であるイギリスについて言うならば、17世紀から18世紀にかけての時期が、これらのサブシステムの成立期であって——もちろん、厳密にはサブシステムの生成は連動しつつも同時ではない——、トレルチの言う古から新へのプロテスタントティズムの転換は、まさにこの時期に重なっている。

以上の問題点を、セオドア・ウォーカーの議論によって確かめてみよう。ウォーカーは、大西洋を横断した近代奴隷制の成立こそが近代のメルクマール——「近代の歴史をそれ以前の歴史から区別する主要な出来事」——であることを、黒人神学(Black Theology)の立場から主張している。

3. 時代区分2

・ジャック・ル＝ゴフ『時代区分は本当に必要か? 連続性と不連続性を再考する』
藤原書店、2016年。

4. 近代の遺産・負債

「近代」をどのように描くのか？ 現代はこの「近代」の遺産と負債において理解しなければならない。

5. 歴史主義（自然主義と対をなす）

近代的学知の基礎（文献学と歴史学）、世界観、イデオロギー

1920年代を中心に「体系と生」という問題。

・「歴史」という問題圏

内在性／超越性

相対性・個別性／絶対性・普遍性 → 進化あるいは発展

集団・国家／個人・主体性

精神（時間的連関・自由）基盤／自然（決定論）

・腐敗した正義

植民地主義と階級対立

（芦名定道「第4部 近現代」、土井健司監修『1冊でわかるキリスト教史』日本キリスト教団出版局、2018年。）

↓

現代キリスト教思想の諸動向は、この問題圏から分岐してきた。

・神学の学的基盤を求めて

弁証法神学あるいは解釈学的神学

・「解放の神学」系／「科学技術の神学」系

2. 現代神学 1 : 自由主義神学と弁証法神学

(1) 近代的知と自由主義神学

1. 19世紀のキリスト教思想

<「第4部 近現代」、土井健司監修『1冊でわかるキリスト教史——古代から現代まで』日本キリスト教団出版局、2018年>

「近代の知的世界は、啓蒙主義の科学理念を基盤に、キリスト教思想をも巻き込みつつ展開した。ここでは、近代の知的世界の基本を自然主義と歴史主義という2点において説明し、それに基づいて、19世紀に確立した近代聖書学について考えてみたい。

① 近代的知のモデルとしての自然主義

ニュートン科学を基盤として18世紀に成立した実証主義的科学（現代人の科学のイメージ）は、19世紀には物理学や天文学を超えて、近代的な知一般のモデルとして機能するようになる。それは自然主義、つまりすべての自然現象を自然の内部で（自然の因果性において）説明し理解できるとする認識論的立場と特徴付けることができるものであり、キリスト教神学とも無関係ではない。聖書にも見られる超自然的実在や奇跡は自然主義と対立するものとされ、それは超自然・奇跡の排除あるいは合理化を生じることにもなった。これは後に見る進化論論争の知的背景にほかならない。

② 歴史主義とキリスト教の相対性

近代的知のもう一つの特徴として、歴史主義を挙げることができる。近代の歴史概念は多義的でありしばしば混乱した議論の原因となってきたが、基本的には次のようにまとめることができる。すなわち、人間が経験する現象の一切が歴史的であり、その歴史的現象の説明と理解は、歴史的連関の内部で行われうるし、行わなければならない、と。キリスト教にとって歴史主義がもたらしたのは、キリスト教を歴史的現象として理解し研究するという態度であり、それは突き詰めて考えられるとき、キリスト教の教義、道徳、価値観の相対性の認識（歴史相対主義）をしばしば帰結することになった。キリスト教は歴史的連関の中で成立発展してきた歴史的宗教であり、その真理や価値がその歴史的範囲（ヨー

ロッパ世界)内に限定されたものであり、決して普遍的なものではないという議論である。古代から中世にかけてのキリスト教が自然法に基づいた普遍性の議論を展開できたのと比べれば、近代の知的状況はキリスト教の真理と普遍性を自明視することを困難にした。

③ 近代聖書学とその諸前提

ルネサンス期に始まった人文主義の文献学が宗教改革の聖書主義と連関することによって、聖書の学問的研究は近代を通して進展したが、19世紀には、近代的学問としての近代聖書学が成立することになった(ドイツを中心に)。近代聖書学は、法学、言語学、哲学、神学、地質学、生物学などの諸学問とともに、歴史主義あるいは近代歴史学と強く結び付いており、その点で、近代聖書学は、近代世界(近代的な日常性)へのキリスト教の適応という歴史的動向の中に位置するものと言えよう。

19世紀の近代聖書学の成果については、旧約聖書についての資料仮説、古代地中海世界の宗教史の文脈におけるキリスト教の位置づけ、イエス伝研究など、さまざまなテーマが挙げられる。こうした聖書学的研究は、トレルチまたパネンベルクが指摘するように、歴史主義(歴史の出来事は歴史的因果性の内部で説明する。超歴史的な事柄は持ち込まない)に依拠しており、そこから帰結するのは、近代聖書学における過去の出来事は歴史家(=研究者)の「現在」という視点から解釈するという方法論的態度であった。」

2. ドイツ・プロテスタント神学諸潮流

19世紀の欧米のキリスト教の特徴的な動向を思想的な側面から見ておこう。

フランス革命とナポレオン戦争後の時代状況は、ドイツに国家的また教会的な統一(国民国家形成)への努力を要求することになる。プロイセンにおけるルター派と改革派との合同教会の成立(1817年)はその成果であり、国民的統一の機運は、ウィルヘルム1世のもとにおけるドイツ帝国成立へと結実する(1871)。この間、ドイツの著しい工業化に伴い社会的矛盾が激化し、慈善事業と一体化した「内国伝道」が進められた。

こうした背景のもと、19世紀のドイツ・プロテスタント神学は、宗教改革以降の正統主義、敬虔主義、啓蒙主義といった思想的遺産の上で多様な展開を示すことになる。大まかに整理すれば、正統主義の神学思想を堅持する保守的傾向の教会の神学(ネアンダー、トールック、ミュラー)と、近代的知の状況に適応することをめざし、特に歴史批評を受容することによって伝統の学問的批判的再考をめざす神学(近代聖書学や近代歴史学の方法を積極的に受容し、カントやヘーゲルの哲学思想を前提とする。シュトラウス、パウアー、バウル)とを両極として、これらの両極の中間に立つ調停神学(エアランゲン学派のフランクとホフマン、あるいはリヒャルト・ローテやマルティン・ケーラー)をまとめることができる。また保守的傾向の教会の神学(積極的神学あるいは復古的神学)に対して、その対極にあって伝統に対する自由な学問的批判を行う神学はしばしば自由主義神学と称されるが、これはキリスト教的伝統の弁証を試みる点では、調停神学的な性格も有している。この自由主義神学の起点に置かれるのが、シュライアマハーであり、その系譜にはリッチェル学派(ヘルマン、ハルナック)、宗教史学派(ヴレーデ、ヴァイス、トレルチ)など、19世紀後半から20世紀に至るドイツの学問的神学をリードした神学者が含まれている。

3. 自由主義神学：神学の自由主義

・近代プロテスタント神学の課題=宗教改革以降の神学諸潮流の調停可能性

キリスト教合理主義／調停神学／正統主義神学／強硬な伝統主義

自由主義

積極主義(実定主義)

Liberalism

Positivism

・メルクマールとしての聖書学

・ドイツから世界へ

(2) トレルチ

・トレルチ (Ernst Troeltsch, 1865-1923)。ドイツのプロテスタント神学者、宗教哲学者。1892年からボン大学、1894年からハイデルベルク大学で組織神学の教授。1915年からはベルリン大学で哲学の教授。

1. リッチェル学派からリッチェル批判へ

・「A・リッチェルから学んだこと」：「教義的伝承の判明な把握」「近代の精神的宗教的状况の同様に判明な把握」(森田、219)

「トレルチは、リッチェルにおけるこの二つの要素の統一にたいして疑念をさしはらむ」
「一つは、リッチェルの宗教的認識の立場に対してであり、今一つはその歴史概念に対して」(佐藤、166)



2. 基本的課題「近代世界をいっそう率直に検討することによってキリスト教的理念世界を徹底的に思惟し、明確に系統的に述べること」

「キリスト教的理念と近代世界との関係が倫理的次元の問題に深く根ざしていることを見いだした」(219)

「実践としての倫理的領域のなかでも、とりわけ社会倫理の領域において、トレルチは教義的伝承と近代世界との対立葛藤が現われることを看取する」、「社会集団の宗教的実践として理解され答えられるべきである」(220)

3. 『社会教説』(Die Soziallehren der christliche Kirchen und Gruppen, 1912)

福音→各時代における国家、経済、家族、社会などをめぐる諸教説

諸類型(理念型)：教会(Kirche)、分派(Sekte)、神秘主義(Mystik)

4. 「伝統との連関を保ちつつ新しい時代において新しい総合を創造する「精神力」の連続性としてのエトス」は「まず社会関係である」(228)

5. キリスト教の本質

『<キリスト教の本質>とは何か』(1903) cf. ハルナックとその教理史

批判としての本質、発展としての本質、理想としての本質(本質規定とは本質形成である)

「本質とは直観的な抽象であり、宗教的・倫理的な批判であり、活動的な発展概念であり、そして未来を形成し新たに結ぶ仕事を据える理想なのである。」(2, 98)

6. 近代プロテスタンティズムの区分

古プロテスタンティズム、新プロテスタンティズム

7. 宗教史学派の神学

「神学における教義学的方法と歴史学的方法について」(Über historische und dogmatische Methode in der Theologie, 1900)

「教会的神学から自由な宗教哲学に正しく基礎づけられたキリスト教神学」、「教会的伝統から全く自由な立場において近代的学問意識において正しく位置づけられた神学」の構想(佐藤、169)

「伝統的な教義学から決定的に彼を決別させたものは、近代的歴史意識とそれに伴う歴史学である」(169)

シュライアマハー(DogmatikからGlaubenslehreへ)、リッチェルの線上。

8. 歴史的方法の特徴：方法、認識、存在、歴史主義

・批判(Kritik) ・類推(Analogie) ・相互作用(Wechselwirkung)あるいは相関(Korrelation)

「キリスト教をも含む宗教史全体の包括的連関の中にキリスト教は置かれねばならず、キリスト教に関する評価も全体的連関からなされねばならない」(171)

9. 「宗教史学派の教義学」(Die Dogmatik der "religionsgeschichtliche Schule", 1913)

・二つの研究方向

- 1)キリスト教の純粹に歴史的研究 2)それに基づいたキリスト教の妥当性

・教義学の4つの課題

- 1)諸宗教との比較を通じたキリスト教の最高の妥当性の証明
2)キリスト教(歴史的連関において成立し様々な要素を摂取し発展してきた歴史的複合体)の本質が何を意味するか。
3)キリスト教の本質の叙述(=狭義の教義学)
 神、世界、人間、神の国、永生などの諸表象を含む
4)教義学は学問的知識や方法を前提とするが、それ自体は、一種の信仰告白であり、説教や宗教教育の手引きである。実践に関わる。それ自体は近代的な学問ではない。

↓

伝統的な教義学の解体、『信仰論』

10. カント的な宗教哲学の構想

・心理学と認識論 → カントの批判哲学による解決

経験から経験のア・プリオリな条件へ、実証主義的宗教心理学への批判

「心理学的なものの中に含まれる理性が自己の活動を通じて自己自身を認識するという仕方」
「認識論的な循環」→「無限に繰り返されるべき課題」(177)

「ア・プリオリな基本概念」は「不断に成長」「自己修正的」

11. カント主義の拡張 cf. 波多野

認識論のみがアプリオリではない。精神活動の諸領域のアプリオリな構造。

宗教的アプリオリ、この宗教的アプリオリが現実化する(心的現象)

↓

cf. ユングの元型(林道義)

12. 宗教の本質:

- ・宗教現象の心理学的認識を可能にする普遍概念・類概念(宗教心理学)
- ・宗教の真理内容(宗教認識論)、事実に対する価値、宗教的アプリオリ
- ・歴史上の諸宗教の段階的な評価、宗教の理想への適用、歴史を貫いて遂行される真理内容の内的運動(宗教の歴史哲学)
- ・生全体の中での意味、最も普遍的で原理的な世界知と宗教の主張する実在(神)との関係(宗教の形而上学)

13. 歴史主義の諸問題: 歴史主義と歴史相対主義

近代=実在・現実の歴史化(大木英夫『新しい共同体の倫理 <監編 上下>』教文館)

歴史の多義性

↓

14. キリスト教の絶対性(普遍史)からヨーロッパ的文化総合へ

・1902: Die Absolutheit des Christentums und die Religionsgeschichte

「救済宗教」「キリスト教は人格主義的な宗教性の最も強力で集中的な啓示」(199)

・1922: Der Historismus und Seine Probleme, Der Europasimus

・歴史相対主義はニヒリズムか? cf. H.R.ニーバー(『啓示の意味』)、パネンベルク

(3) 弁証法神学運動と神学刷新

「第1次世界大戦は、列強の利害が衝突し「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれたバルカン半島においてオーストリア皇太子夫妻が暗殺(1914)されたことを切っ掛けに開始され、ド

イッ・オーストリアなどの同盟国とフランス・ロシア・イギリス・日本など協商国（連合国）に分かれた世界規模の総力戦として展開した。世界大戦終結前に、1917年にロシア革命が起こり、戦後に向けた政治的変動は始まっていたが、特にドイツは、1918年に皇帝と諸君主が退位し共和国になり（ドイツ革命）、連合国に降伏した。第一次世界大戦として噴出した19世紀的近代の政治秩序の行き詰まりは、20世紀の学問世界においてもいたるところで顕在化することになる。

第1次世界大戦後に出版され、爆発的に読まれた、シュペングラー『西洋の没落』（1918）は、この時代の雰囲気や危機感を体現したものである。自然科学における相対性理論と量子力学、歴史学に基づく人文社会学に対する戦後世代の批判（学問の革命）、フッサールの現象学の影響の浸透発展による哲学運動（新カント学派からの離脱）などが並行して発生し、欧米の思想世界は大きな変動（創造的混沌）を体験しつつあった。

キリスト教神学も例外ではない。A.シュヴァイツァーの『イエス伝研究史』（1906）は19世紀の近代聖書学を否定的に総括するものであり、聖書学は新しい方法論（様式史）の探求に向かうことになる。しかし、こうした転換をもっとも劇的に示したのは、カール・バルト（『ロマ書』1919）らが第1次世界大戦後からワイマール時代にかけて推進した弁証法神学運動であった。神の主権・自己啓示とその下における人間の危機を掲げて、19世紀の自由主義、文化主義、歴史主義とそれに依拠した近代神学を痛烈に批判した。バルトのほか、E.トゥルナイゼン、F.ゴーガルテン、E.ブルンナー、R.ブルトマンら、次の時代を背負う若手の神学者が集い、その周辺にはP.ティリッヒが存在し、アメリカのニーバー兄弟も基本的な問題意識を共有していた。1930年代に入ると、弁証法神学運動の担い手たちはそれぞれが独自の方向へと進むことになり、バルトは、ナチズムを支持する「ドイツ的キリスト者」とのドイツ教会闘争を指導する道を選択した。この神学運動はその後の半世紀にわたるキリスト教神学を大きく規定するものとなった。」

↓

- ・ 神学の学問性をめぐる議論：バルトとハルナックの論争
同時期の学問論争の中に位置する
- ・ 社会とキリスト教・教会との関係

<参考文献>

1. 土井健司監修『1冊でわかるキリスト教史——古代から現代まで』日本キリスト教団出版局、2018年。
2. 栗林輝夫・西原廉太・水谷誠『総説 キリスト教史3 近・現代篇』日本キリスト教団出版局、2007年。
3. H・ツァールント『20世紀のプロテスタント神学（上）（下）』新教出版社。
4. P・ティリッヒ『キリスト教思想史Ⅱ』（著作集 別巻三）白水社。
5. Horst Stephan, *Geschichte der deutschen evangelischen Theologie seit dem deutschen Idealismus*, 2.Auflage von Dr Martin Schmidt, de Bruyter, 1973.
Stephan-Schmidt
6. W. Pannenberg, *Problemggeschichte der neueren evangelischen Theologie in Deutschland. Von Schleiermacher bis zu Barth und Tillich*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1997.

<トレルチ・参考文献>

0. 『歴史主義とその克服』理想社、1956年。
『ルネサンスと宗教改革』岩波文庫、1959年。
『トレルチ著作集』全10巻、ヨルダン社、1980-88年。

1 宗教哲学 2 神学の方法 3 キリスト教倫理 4・5・6 歴史主義とその諸
問題 7 キリスト教と社会思想 8・9 プロテスタンティズムと近代世界
10 近代精神の本質

『私の著書』創元社、1982年。『信仰論』教文館、1997年。

『古代キリスト教の社会教説』教文館、1999年。

1. 武藤一雄『神学と宗教哲学の間』創文社、1961年。
2. 熊野義考「トレルチ」(『歴史と現代 上』全集10巻、新教出版社、1981年)。
3. 佐藤敏夫『近代の神学』新教出版社、1964年。
4. 森田雄三郎『キリスト教の近代性』創文社、1972年。
5. 大林浩『トレルチと現代神学』日本基督教団出版局、1972年、『アガペーと歴史的精神』日本基督教団出版局、1981年。
6. 柳父圀近『ウェーバーとトレルチ—宗教と規範についての試論—』みすず書房、1983年。
7. 安酸敏眞 *Ernst Troeltsch. Systematic Theologian of Radical Historicality*, Atlanta: Scholars Press, 1986.、『歴史と探求—レッシング・トレルチ・ニューバー』聖学院大学出版会、2001年。
8. H・E・テート『ハイデルベルクにおけるウェーバーとトレルチ』創文社、1988年(1985)。
9. 近藤勝彦『トレルチ研究』上下、教文館、1996年。
10. 佐藤真一『トレルチとその時代』創文社、1997年。
11. F.W. グラーフ『ヴェーバー・トレルチ・イエリネック—ハイデルベルクにおけるアングロサクソン研究の伝統』、『トレルチとドイツ文化プロテスタンティズム』聖学院大学出版会、2001年。